

## 秋に「種まき」

牧師 山本 護

**「わたしは、その季節季節に、あなたたちの土地に、秋の雨と春の雨を降らせる。あなたには穀物、新しいぶどう酒、オリーブ油の収穫がある」 申命記 11章 14節**

和歌では、秋の歌が圧倒的に多いらしい。つまり作歌の動機となる心的な「もののあはれ」が秋にもっとも充溢するためか、といったことを想像します。

申命記の「秋の雨と春の雨」、直訳ならば「先の雨と後の雨」。ヘブライ人の季節感からすると、秋が先で春は後のようです。彼の地では、秋から冬が雨季。神からの恵みの雨を待って種まきをするために、秋が始めなのでしょう。日本の、伝道所



の周囲の田圃では稲刈りが終わり、のんびり温泉につかる時季ですが。

八ヶ岳伝道所の聖餐式では、序詞で独自の文言を用いています。「～主なる神によって大地はつくられ、その豊かさによって麦が実りました。主なる神によって太陽はつくられ、その光によって葡萄が実りました。麦がパンになり、葡萄が酒になるまで、人、鳥、昆虫、微生物たちの労働がありました～」といった調子の文言です。

「秋の雨と春の雨を降らせ、あなたには穀物、新しいぶどう酒」。恵みとして与えられた穀物でパンを焼き、ぶどう酒(ノアルコール)と共に分かち合って、聖餐式がおこなわれます。キリストの十字架と復活をこの身に受ける聖餐。神からの直接の恵みに加えて、微生物の労働をも含んだ自然を統べ給う力に、心身が調律される思いです。

私たちの聖餐式は、降誕祭と復活祭、聖霊降臨日と宗教改革記念日の年に四回。先日、宗教改革記念日礼拝で聖餐に与り、皆さんが帰ると、礼拝堂は静寂のとばりに。今、伝道所がいただいている「秋の雨」の恵みを唐突に、ふうと実感しました。

「パンを裂き分けあいルター記念日は」。恵みのパンを分かち合う私たちキリストの体は、これから何をするのか。聖書の民のような種まきでしょうか。往く秋がいくら鮮やかであっても、いつまでも陶然としていられません。恵みは時宜に応じ、「季節季節」に与えられているのですから。日毎の恵みを淡々と自覚しながら、種をまいていきたい。Ω